

絵本や児童文学における新しい家族のかたち

～英米のリアリズム作品にみる非血縁の家族～

さくまゆみこ

〈要旨〉

子どものための絵本や文学には、身近なものとして家族が登場する作品が多い。その家族像は当然のことながら時代とともに変遷してきている。特に欧米の作品には、親の家出、親の離婚や再婚、虐待する親、子どもが親の保護者になる家庭、単親家族、新しいタイプの母親、LGBTの家族など、従来型ステレオタイプを離れたさまざまな家族が登場している。ここでは、最初に家庭物語の伝統があるアメリカで、子どもの本に描かれる家族像がどう変化しているかを述べ、次に非血縁の親（継親）が描かれた作品と、非血縁の子ども（養子や里子）が描かれた絵本や児童文学を、いくつかの代表的な作品を取り上げながら考察する。取り上げるのは、この問題について知らしめようという啓蒙的な作品ではなく、受賞作品やロングセラーなど作品そのものの質が高いとして評価されている、主に英米の作品とした。最後に、日本での状況についても触れた。

キーワード：絵本、児童文学、家族、非血縁、養子・里子

はじめに

子どもの置かれている状況や家族のありようは、時代と共に変化している。児童文学や絵本にも、そうした状況は当然のことながら反映してきているはずだが、実際はどうだろうか？ 研究プロジェクトの中では、親の家出、親と子どもの立場が逆転する家庭、虐待する親、親の離婚や再婚、単親家庭、新しい母親像、LGBTの親などのジャンルに分けて、それについてリアリスティックな絵本や児童文学がどう描いているかを研究してきたが、ここでは紙数も限られているので、非血縁の家族がどう描かれているかという点にしぼって考察してみたい。このジャンルは近年になって登場してきたものであり、日本ではまだみるべき作品があまりない。したがって主に英米のリアルな状況を描く作品をとりあげて、作家の子どもたちの寄り添い方にも注目しながら考察を進める。また、英米では最近では家族のあり方の多様性を子どもに知らせることが重要だと考えられており、啓蒙的な作品も数多く出ているが、ここでは文学的にも質の高い作品（児童文学賞の受賞作品、定評

ある作家の作品や、長期にわたって読み継がれている作品など)を取り上げたい。というのは啓蒙的な作品は教育や研究の現場では話題になっても広範な読者を獲得できず子どももなかなか読まないため、社会に影響をあたえることが少ないからである。

このテーマに関心をもつきっかけとなったのは、Susan Kuklin による *Families*¹⁾ というアメリカの写真絵本である。2006年に初版が出たこの絵本には、ひとりっ子の家族、子どもの多い家族、国際結婚による多文化の家族（アメリカと日本、ドイツとフィジー、プエルトリコとドミニカなど）、親が離婚・再婚した家族、障害者のいる家族、実子のほかに養子のいる家族、独身女性が中国から養子を迎えた家族、父親二人の家族、母親二人の家族など、実に多様な家族を紹介するとともに、ここに登場するどの子も「愛されていて、安心できる居場所がある」と感じており、それぞれの家庭があたたかい雰囲気を持っていたと、著者は前書きで伝えている。

日本の児童書出版界にも一時は多様な家族像を作品の中で提供したいという気運があったのだが、近年は過半数を代表するような家族像の提示に終始する作品が多い。いろいろな場面で多様性が少なくなっている日本の出版界を検証するうえでも、この論考が役に立てばと考えている。

なお本文中の出版年は、どれも原著の出版年を記し、引用は日本語版から行った。

1. アメリカの作品における変化

アメリカには、ルイザ・メイ・オルコットの『若草物語』（1868）をはじめとする家庭物語の長い伝統がある。この章では、家族をテーマに作品を書いてきた二人の作家を取り上げて、描かれ方の変遷を考えてみたい。

ローラ・インガルス・ワイルダーは60歳を過ぎてから、作家の娘ローズに勧められて自伝的な要素の強い小説「インガルス一家の物語」9点を著した。このシリーズは、「家庭というものの在り方を立体的に前面に押し出した優れた家庭小説になっている。と同時に、開拓農民に支えられたアメリカ建国の精神を浮き彫りにさせている」²⁾とされ、アメリカ人の多くは自分たちのルーツにある作品として愛読し³⁾、日本でも数社から翻訳出版されている⁴⁾。またシリーズはアメリカで連続テレビドラマにもなり、日本でもNHKで放映されて人気を博した。

このシリーズに描かれている家族像は、父親が外敵から家族を守り、土地を開墾して家を建て、母親は家事育児にいそしみ、夫が決めた計画には内心では不服でも従う。子どもたちは助け合い、親の言うことを基本的には守る。家族が助け合って暮らし、家族としての一体感が強い。

この家族像を「家族の理想的な姿だと思う」と言う人はアメリカばかりか日本にも少なくない。しかし、これは西部開拓時代の話であり、外敵（野生動物、先住民）がいたし、子どもは親を通してしか情報を得ることができなかった。また、親がすぐれた技術をもつ

ていることを生活の中で目の当たりにすれば子どもは当然のことながら尊敬の念を抱く。同じような条件下にない現代社会で、このような家族のありようは難しいといわざるを得ないだろう。また、このシリーズに描かれるあたたかい家族像の背景には、ワイルダーが社会の一線から退いた後に記憶の中で美化された物語を紡ぎ出したという側面もあったように思う。

次に、一人の作家でも執筆年代が違くと描く家族像も違って来る例として、ベヴァリー・クリアリーの作品を見てみたい。彼女の作品も日本では人気があり、「ヘンリーくん」や「ラモーナ」のシリーズは、初期のものはすでに半世紀以上にわたって読み継がれている。

最初にラモーナが主人公となった『ビーザスといたずらラモーナ』⁵⁾ (1969) では、外で働く父親、専業主婦の母親、小学生の姉ビーザス、幼稚園児のラモーナという家族構成で、やんちゃな妹ラモーナがいろいろな騒動を引き起こす。ここでは血縁家族の絆はまだ健在である。ところが、同じシリーズでもニューベリー賞銀賞を受賞した『ラモーナとおとうさん』⁶⁾ (1977) になると、失職した父親が子どもの前でもタバコを吸い、母親はフルタイムで働くようになり、家族の関係がぎくしゃくしはじめる。しかし、ここでもまだ血縁家族が破綻することはない。

クリアリーがニューベリー賞本賞を受賞した『ヘンショーさんへの手紙』⁷⁾ (1983) は12歳の少年リーが主人公で、両親はすでに別れており、リーは母親と別の町に移って新たな生活を始めている。リーは転校した先でもいじめにあい、なかなか新しい環境になじめない。長距離トラック運転手の父親は、人はいいのだが、子どもとの約束を忘れるなど信頼性に欠ける親として描かれている。興味深いのは、母親が息子に結婚や離別の理由を率直に話していることである。

クリアリーは一つの例だが、同じ作家でも、時代と共に描く家族像が変遷することはよくある。単なるエンタテインメントだけを書いている作家は別として、社会の中の子どもの状況をよく見て書いている作家なら当然のことだろう。

2. 再婚による非血縁の親

次に、親が再婚することによって非血縁の継父・継母が家族の中に登場する四つの児童文学作品について考察してみたい。

アメリカの作家パトリシア・マクラ克蘭のニューベリー賞受賞作『のっぽのサラ』⁸⁾ (1985) は、母親が病死して父親と一緒に暮らす子どもたちが、継母（候補）と心を通わせていく物語である。アンナ（姉／語り手）とケイレブ（弟）は、母親が死去して以来家庭に歌がなくなってしまったと感じている。父親が新聞に後妻を募集する広告を出し、サラという女性が応募してきたのを知ると、二人は胸をおどらせると同時に気をもむ。

「来てくれるかなあ」

ケイレブが言いました。

「それに、ずっといてくれるかなあ。ぼくたち、うるさくてしょうがないなんて思われたら、どうしよう？」

「あんたがうるさくてしょうがないのは、たしかね」わたしはいつてやりました。でもほんとうは、わたしも心配でした。サラは海が好きで好きで、たまらないのです。海からはなれて、畑と草原と空のほかになにもないようなところに、来てくれるでしょうか。(p.23)

継母というのは昔話では悪役を演じることが多く、創作作品でも子どもを理解しない存在として描かれることが多々あるが、この子たちが案じているのは、サラが意地悪だったかどうかではなく、サラがここを気に入ってくれなかったらどうしよう、なのである。その点でこの作品はすでに継母のステレオタイプ像から離れている。

もちろん生後すぐに生母が亡くなったケイレブと、生母の思い出を持っているアンナとは少し対応が違う。ケイレブは、サラが来るとすぐにつきまとうが、アンナはそうはできない。でも、折々に海が恋しいと言うサラに、アンナは「海が恋しいなんていわないで！」(p.92)と祈りのようにつぶやく。しばらくして一緒に嵐を乗り越えて、家畜たちの無事を確認した後は、アンナがこんなふうに思う場面がある。

パパはなにもいわずに、サラの腰に腕をまわして、だきよせました。パパのあごの下にサラの髪があります。わたしは目をとじました。ふいに、ママとパパがこんなふうに立っていたのを思い出したのです。ママはサラより背が低くて、金色の髪をパパの肩におしつけていました。そっと目をあけてみると、ママのかわりにサラが立っていました。ケイレブはわたしを見て、にこにこ笑っていました。これ以上うれしい顔はないというくらい、にこにこしていました。(p.113)

サラには自立心もあり、馬に乗ったり馬車を御したりする方法も学んで、ひとりで町に出かけて行く。子どもたちはこの時も、そのままサラが出て行って戻ってこないのではないかと本気で心配する。でも夜になって帰ってきたサラは、こう言う。「いつだって前の家は恋しいけど、あなたたちに会えないほうが、もっとさびしいもの」(p.131)。

これは、非血縁の親子（続巻では父親とサラが結婚している）がお互いを思いやり心を通わせる物語である。サラと子どもたちの心がつながっていく過程は、大きなドラマとして読者の心に迫ってくる。

ニューベリー賞作家 E. L. カニグズバークの『800番への旅』⁹⁾ (1982) の主人公マックス（愛称ボー／語り手）の両親は離婚している。マックスは母親サリーと暮らしているのだが、母親が再婚することになり、そのハネムーンの間息子は父親のウッドロウ（ウッディ）

と暮らすことになる。父親はラクダを連れて各地をまわり、お客をそのラクダに乗せて生活費をかせいでいる。きちんとした生活が好きで上昇志向もある母親の影響もあって、最初のうちマックスは久しぶりに会った父親を批判的にながめ、周囲にいる一風変わった人たちのことも冷ややかに見ている。しかし、徐々にマックスにも父親のよさがわかり、社会の周辺にいる人たちのたくましい生き方についても知っていく。

ところが物語の最後の方で、マックスの名付け親であるトリナ・ローズがマックスに、「(ウッディは) あんたのことも、まるで自分のほんとの息子みたいに愛しちゃったのね」と口をすべらせる。

「それ、どういうこと？ ほくのことを、自分のほんとの息子みたいに愛したって？ お母さんは、結婚したとき、妊娠してたんだよね？」

「そう、でもウッディの子じゃなかった。ちがったのよ。ゆうれい・サリーは、あたしたちが牧場に着いたとき、もう妊娠してたのよ。そのことは聞かなかったの？ ボー？」

のどのところに、空気のかたまりができて、それが小さい風船みたいにふくれ上がり、心臓はぎざぎざになって、胸の中でマッチばこがおどっているみたいに、ほくを苦しめた。ほくは風船を飲みこんで、中から出てきそうな泣き声を、おさえつけた。そして泣かなかった。(p.167-8)

マックスは事実を知って衝撃を受け、どういう態度をとればいいのか思い悩むが、「ここではただ、ウッディの息子ボーであることを楽しめばいい」と考え直す。最後の場面は、夏休みが終わってウッディがマックスを車で飛行場まで送っていく場面である。

それからおしりをすべらせて、ウッディに近づいた。ウッディはハンドルを持った片手を放して、ほくをひき寄せた。

ほくは空港に着くまでのあいだ、じっとよりかかっていた。(p.171)

この場面からは、非血縁の父親ウッディに対するマックスの信頼と愛情が感じられる。

同じくアメリカの作家ヴィンス・ヴォーターの『ペーパーボーイ』¹⁰⁾ (2013) はニューベリー賞銀賞を受賞している。舞台は1955年のメンフィスで、主人公ヴィクターは吃音をもつせいで世界がなかなか広がっていかないもどかしさを感じている。しかし夏休みに友だちのかわりに新聞配達をすることになり、配達先で様々な人に出会って変わっていくというのがメインストーリーである。そこに、ヴィクターが出生証明書の父親の欄に「不明」と書いてあるのを見て思い悩むという、わき筋が入っている。

どうしてもわからないことがひとつある。だれかよその男の人とお母さんのあいだに

ぼくが生まれたのだとしたらなぜぼくはお母さんよりお父さんというほうが好きなんだろう？ ぼくはお母さんと話すよりお父さんと話すほうがずっと好きだ。お父さんはぼくがひどくどもることを全然気にしていないように思う。(p.119)

ちなみにヴィクターはどもりを防ぐために息継ぎをしょっちゅうするので、文章は息継ぎのカンマなしで書くため、訳文も読点なしになっている。上記の部分からは、著者が血縁より愛情のほうを価値として上においているらしいことがわかる。また、出張から帰ってきた父親とキャッチボールをしている場面では、ヴィクターはこう考える。

もしぼくがこの人とお母さんのあいだにできた子どもだったらなにがあってもこの人はぼくの父親ってことになる。(中略) でもぼくはお父さんとお母さんのあいだにできた子どもじゃない。「おまえはおれの子じゃない。おまえを育てたりおまえの相手をしたりする義務はない」と言うことだってできただろう。(中略)

出生証明書の父親欄は「不明」だったかもしれないがぼくから見れば今こうしてワイシャツ姿でネクタイの先をボタンのあいだに突っこんでキャッチボールをしてきている背の高い男の人こそが父親だ。ピカピカだったお父さんの革靴は花壇に入ったボールを拾ったものだから泥だらけになった。この人はいつだってぼくのためにこの世のほとんどどんなことでもする気である。でもよく考えてみるとそう思わなきゃならない義務なんてない。(p.268)

物語の最後では、ヴィクターは「お父さんとお母さんにぼくが生まれてきたいきさつがどうであれ二人の子どもでいられてうれしい」(p.278) とはっきり言っている。家族にとっていちばん大事なものは血のつながりではなく、一緒に過ごす時間の質だという価値観がここにも表現されている。

イギリスの作品では、チルドレンズ・ローリエトの称号を受けたアン・ファインの『それぞれのかいだん』¹¹⁾ (1995) に、多様な家族のありようが登場する。実の父親には一度も会ったことがないコリンは、母親がその後一緒に住んでから別れてしまった継父のことをずっと思っている。そしてお金を貯めていつか必ず継父をさがしに行こうとしている。ラルフには継母が三人いる。というように、物語の主役の子どもたち全員が、親の離婚・再婚を経験し、非血縁の親と折り合って、あるいは愛情で結ばれて生きている。

3. 養子・里子をテーマにした絵本

次に、非血縁の子どもを迎えることをテーマにした四点の絵本を考察する。

ホリー・ケラーの『ママとパパをさがしにいくの』¹²⁾ (1991) は、アメリカの書評誌ホー

ンブックに優秀作品として選ばれた絵本で、動物を主人公にして養子の心情を描いている。最初の場面では、トラのママがヒヨウの子どもホラスを寝かしつけながら、こう話している。

「あなたに このうちに きてもらったのは、小さな あかちゃんだったときよ。
なぜって、あなたには さいしょの かぞくが いなくなってしまうて、
あたらしい かぞくが ひつようだったから。あなたの からだのもようは
すてきだったわ。ぜひ、うちの子に なってもらおうと おもったの」

しかし、ホラスはママの話が終わる前にいつも眠ってしまう。ホラスは幸せなのだが、体の色や模様が家族と違うことは気になり、ある日本当の家族を探しに出かける。そして、とうとうヒヨウの一家を見つけ、そこに仲間入りして子どもたちと楽しく遊ぶ。しかしそのうちふとホラスは、育てのパパとママを思い出し、ヒヨウの家族の誘いを断って、「ぼく、もうおうちへかえりたいの」と言う。おうちとは、養親の家のことである。そしてその夜、いつもの話を養母が繰り返すのを今度は最後まで聞いて、トラの両親を自分のほんとうのママとパパとして自ら選びとる。

同じくアメリカのロングセラー絵本『ねえねえ、もういちどききたいな わたしがうまれたよのこと』¹³⁾ (1996) の作者ジェイミー・リー・カーティスは、自身も二人の養子を迎えた女優である。この絵本は、女の子が両親にアルバムを見せながら、「ねえねえ、もういちどききたいな わたしがうまれたよのこと」と言っている場面から始まる。しかし、次の見開きは、パパとママが自宅にいて、赤ちゃんの誕生を電話で告げられる場面なので、読者はおやっと思うかもしれない。知らせを受けたママとパパは飛行機に乗って女の子を迎えにいく。絵本はさらに、生母が若すぎて世話ができないので、女の子が養子になったことを語っていく。この絵本からは、この女の子が大事に育てられていることが伝わってくる。にこにこと楽しそうに描かれる女の子は、それでもたびたび自分が大事にされていることを育ての親に確認したいのだろう。

それから15年たって日本でも同じような絵本が出た。『たからものは なあに?』¹⁴⁾ (2009) である。作者のあいだひさは、「社団法人家庭養護促進協会」の仲介で特別養子縁組をしている。絵本に登場するのは、二組の家族で、たくやは一緒に暮らす母親のお腹から生まれ、なつかは赤ちゃんの家からやって来た。なつかの養親は、赤ちゃんの家に何度も会いにいき、それから家に迎える。たくやがママのお腹の中で大きくなったのに対して、なつかは言う。「じゃあ、なつかは ママと パパの こころのなかで どんどん おおきくなったんだね!」

あいだはあとがきで、「結婚前から、実子の有無にかかわらず養子を迎えたいと考えていた私たち夫婦は、『子どもをもつ最後の手段』とでもいうような、日本での養子の考え方に驚いたものです。(中略) 里親や特別養子縁組に限らず、家族の始まり方はさまざま

であってよいと思います。そしてどんな始まり方でも、互いを心から思いやり、愛し合って築き上げてこそ家族だと信じています」と述べているが、血縁重視の傾向が強い日本の現状を変えていきたいという意図がこの絵本にはある。

ジャスティン・リチャードソンとピーター・パーネルが文を書き、ヘンリー・コールが絵をつけた『タンタンタンゴはパパふたり』¹⁵⁾ (2005) はアメリカ図書館協会が優良図書に選び、ラムダ文芸賞 (LGBT など性的少数者を登場させた優秀作品にあたえられる) の最終候補にもなった。セントラル・パーク動物園にいるペンギンの実話を基に作られた絵本である。いつも一緒に雄ペンギンカップルのロイとシロは、ある日卵形の石をあたため始める。その様子を見ていた飼育員が、他のペンギンが遺棄した卵を2羽の巣においてやると、その卵からひながかえりタンゴと名づけられる。ロイとシロとタンゴがよい家族であることは、絵からも感じられる。人間ではないので厳密に養子・里子とは言えないが、非血縁者が家族をつくる絵本としてここに入れておきたい。

4. 養子・里子をテーマにしたアメリカの児童文学・YA 小説

ここでは、非血縁の子どもを迎えることをテーマにしたアメリカの児童文学・YA 小説を四点取り上げる。全米図書賞を受賞したキャサリン・パターソンの『ガラスの家族』¹⁶⁾ (1978) は、11歳の里子のギリ (ガラドリエル) が主人公である。生母コートニーは子どもを捨てているのだが、里親をたらいまわしにされているギリの宝物は、生母の写真である。

ボール紙のわくにプラスチックをはめた写真たての中から、女の人のとび色の目がいづものように笑いかけている。つやつやした黒髪が一本のみだれもなく、きれいなウェーブになってさがっている。まるでテレビの女優さんみたいだが、そうではない。ほら——ここの片すみにこう書いてある。

〈わたしのかわいいガラドリエルへ、いつも愛しています〉

これをあたしに書いてくれたんだ。あたしのために。ギリはこの写真を見るたびに、自分にそういいきかせた。(p.21)

ギリは、ちゃちな写真立てに入った生母の写真と、一行の言葉にしがみついて生きている。生母の実像に触れる機会がほとんどないので、どこまでも理想化することが可能なのである。そんなギリが今回預けられた里親は、メイム・トロッターという「カバみtainな女性」で、発達障害をもっているらしいウィリアム＝アーネストという別の里子も預かっている。おまけに夕食を食べに来るランドルフさんは盲目の黒人だ。ギリはこの家を「はきだめ」だと思う。だれからも真の愛を受けたことのないギリは、「とんがりすぎの鉛筆みたいな気分」(p.38) で、学校でも家でもすべてにつっかかり、自分の強さ

を誇示しようとする。そして、周りに自分を理解してくれそうな人が出てくると、逆に警戒心を抱く。

ギリーはもし少しでもここに長くいたら、骨の髄から自分がだめになってしまうような気がした。この狂った茶色い家と、狂った学校にはさまれて、きっとウィリアム＝アーネストみたいな、ふにゃふにゃのだめな子になるだろう。ギリーが短い人生からまなんだことがあるとするならば、それは人間は強くなくてはならないということだった。さもないと人にまるめこまれてしまう。(p.112)

ギリーがこう思う背景には、前の里親との体験がある。

ディクソンさんはあたしをありったけだいじにして、だっこしてゆすって、だめにした。あたしはママなんてよんで、悲しいことがあると、ひざにはいのぼった。そしてなんと、ディクソンさんはあたしのことを自分のベビーだなんていったくせに、フロリダにひっこすことになったら、なにかのがらくたといっしょにおいていってしまった。(p.132)

ギリーはやがてランドルフさんとトロッターさんのお金を盗み、生母に会いにいこうとする。ところが長距離バスのキップ売り場で疑われて、里親に連絡が行く。あわてて駆けつけたトロッターさんは、ギリーがお金を盗んだこともわかっているが、警官がギリーを一晩とめおこうかときくと、断固として言う。「たとえ一分だって、このわたしが自分の子を留置場へいれられると思うのかい？」(p.170)

この里親は、ケースワーカーとも渡り合ってギリーを連れ帰り、しかも盗みの件には厳しく対処し、なくなった分は働いて返すように言いつけてアルバイト料金リストを提示する。ベテランの里親としてどうすればいいかをよく知っているのである。ギリーが大きく変わるきっかけは、トロッターさんならどこまでも自分を守ってくれるという安心感を得たことと、自分が他者に必要とされていると感じたことである。ランドルフさん、トロッターさん、ウィリアム＝アーネストの三人がインフルエンザで寝込んだためギリーがひとり世話をし、家の中がめちゃくちゃになっている時に、ギリーがその存在さえ知らなかった祖母が訪ねてくる。そして惨状に驚き、「すぐにここから連れ出してあげる」と言って帰っていく。その後でギリーはこう思う。

だれもあたしをここからつれだしたり、できるものか。だれもかれもが、これほどあたしを必要としているときに。(p.208)

しかし、ギリーは法的にこの祖母と暮らさざるを得ない。いやいやながら祖母の家に

引っ越したギリーは、とうとう憧れの生母に会えることになる。祖母が、家を出たきり一度も帰っていない娘をクリスマスに呼び寄せたのだ。でも到着した生母コートニーは、写真とはまったく違っていた。娘を抱くときの描写は、この母親の娘に対する気持ちをよく表している。

そのとき、コートニーがギリーをだきしめた。大きなバッグを胸やおなかにおしつけたままで。それから肩ごしにおばあちゃまにむかって、「この子、あたしと同じくらい背が高いわね」と、まるでギリーがそこにいないかのようにいった。(p.261)

ギリーは、飛行機代も祖母が出したことを知り、母親の実像を目の当たりにして、ようやくさとする。

コートニーは、自分からすすんできたのではなかったのだ。おばあちゃまがお金をだして、こさせたのだ。だから長くいるつもりもない。ギリーをつれて帰るつもりもないのだ。写真のすみにあった「いつも愛しています」は、うそだったのだ。ギリーはこのいまいまいいうそのために、一生を棒にふってしまった。

「あたし、トイレにいくる」

ギリーはおばあちゃまにいった。ふたりがついてきませんようにと祈った。なぜならまっさきにしたいことは、吐くことで、第二は逃げだすことだった。(p.263)

現実には直面して逃げたくなったギリーはトロッターさんに電話をして「帰りたい」と気持ちを伝えるのだが、もと里親との対話から祖母も自分を必要としていることを理解して、祖母の家で暮らす決心をする。

著者のパターソンは、実生活でも実子二人のほかに養子二人を育て、カンボジアからの里子二人の世話もしていた。里子たちが言うことを聞かないとき、ついかっとなって、どうせ一時のことだからと思う自分がいたことを後悔し、この作品については「せめて本の中では、里子に世界最高の里親をあたえたい」(訳者あとがき)と思ったと述べている。トロッターさんは、パターソンが考える理想の里親像として造型されたことがわかる。

ニューベリー賞とホーンブック賞をとったシンシア・ライラントの『メイおばちゃんの庭』¹⁷⁾(1992)でも、母親と死別して孤児になり、親戚をたらい回しにされた少女サマーが主人公になっている。物語の始まりでサマーは高齢の里親であるオブおじちゃんとメイおばちゃんのところへやってくる。ギリーと違って、サマーは自分が愛を受けていたことを信じている。

ある晩、台所で亜麻色の長い髪をあんでるおばちゃんにおじちゃんが手をかしてるところを初めてみたとき、あたしは、森にかけこんでわんわん泣いてしまいたいよう

な気分になった。悲しかったからじゃない。しあわせな気持ちでいっぱいになったからだ。

きっとあたしも、あんなふうに愛されていたんだと思う。よくおぼえてないけど、ぜったいにそうだ。だってそうでなかったら、あの晩おじちゃんとおばちゃんを見て、ふたりの深い愛情に気づくはずがないもの。

(中略) かあさんは自分がもうすぐ死ぬってわかってて、ほかのどのおかあさんよりもしっかりとあたしを抱いて、たっぷり愛情をそそぎこんでくれたにちがいない。いつかあたしが愛というものをみたり感じたりしたときに、それが愛だってわかるように。(p.7)

そして、この二人の里親のところに来たことを、当時6歳のサマーは心から喜び、「ここで過ごした最初の晩は、あたしの人生で、いちばん天国に近い日だった」(p.9)、「ようやく自分のうちにたどりついた」(p.15)と感じている。

しかし、メイおばちゃんはやがて亡くなり、オブおじちゃんは意気消沈して悲しんばかりいる。サマーはなんとか元気づけようとするがうまくいかず、無力感を感じる。

あたしじゃだめだったんだ。おじちゃんを元気づけることはできなかったんだ。おばちゃんがいなくなっても、おじちゃんにはまだ愛情をそそぐ相手が残されているっていうのに、そう、このあたしがいるっていうのに、それじゃだめだったんだ。(p.67)

「ピーター・パン」を書いたジェームズ・バリーは、優秀な兄が亡くなったとき母親がその悲しみからいつまでも抜け出せず、自分のほうを向いてくれないことを嘆いた。つまり、サマーのこの思いは、里子でなく実子であっても感じるものであろう。それでも、12歳になったサマーはまるで保護者のようにオブおじちゃんを支え続け、やがて二人は立ち直っていく。

『ガラスの家族』も『メイおばちゃんの庭』も、子どもにとっては食べ物と同じくらい愛が必要であるということを伝えている。そして、愛をもたらすのは血縁者とは限らず、肉親がかえって加害者になって子どもを苦しめる例もあること、愛とは抽象的な観念なのではなく相手が何を求めているかを察して手をかけ心をかけることだということを語っている。

ニューベリー賞作家カレン・クシュマンが書いた『ロジーナのあした～孤児列車に乗って』¹⁸⁾(2003)は、1881年にシカゴから出発した孤児列車を取り上げている。孤児列車とは、孤児たちを乗せて走り、駅に止まるごとに希望者と孤児の養子縁組をしていくというものである。子どもには施設ではなく家庭が必要だという考えからこうした列車が走っていたのだが、中には労働の担い手として子どもをほしがる者や、年上の女の子を妻代わりにしたいという者もいたので、見極めが大変だったようだ。主人公は12歳の少女ロジーナで、

この孤児列車に乗せられ、小さい子どもの世話をしながら旅をしている。子どもたちは次々に引き取られていくが、ロジーナの引き取り手は最後まで見つからない。とうとうロジーナは、子どもたちの世話係だった女先生と暮らしたいと自分から言い出す。ここまでは子どもは選ばれる側だったが、ロジーナは自分から選ぶという行動に出たのだ。そしてそれを女先生も受け入れ、旅を共にして知り合っていた二人は家族になる。

スコット・オデール賞を受賞したカーク・パトリック・ヒルの『アラスカの小さな家族～バラードクリークのボー』¹⁹⁾ (2013) は、養女ボーが主人公である。ボーには父親が二人いる。ゴールドラッシュの時にスウェーデンからアラスカにやってきた鍛冶屋で裁縫の得意なアービッドと、アメリカ南部出身の黒人で、やはり鍛冶屋と料理人をしているジャックである。母親はいない。舞台はアラスカで、〈楽しみ女〉のミリーが産んだ女の子が、孤児院に入れてほしいと言ってアービッドの手に渡された。それ以来、この女の子はボーと名づけられ、二人の男に育てられている。ボーは、『ねえねえ、もういちどききたいな わたしがうまれたよのこと』の女の子と同じで、自分が二人の娘になったいきさつを何度でも聞いて楽しむ。この作品では、アービッドとジャックがどんな関係にあるのかについては語られていないが、昔ジャックには結婚しようと思った女性がいたことは会話の中に出てくるので、同性愛カップルと決めつけることはできない。

ともあれボーは非血縁の二人の父親や先住民のエスキモーを含めた多様な民族の混じり合う社会で、みんなに見守られて育っている。家ではアービッドが裁縫、ジャックが料理を担当し日常生活には全く困らないが、女の子の育て方についてはまわりの人からアドバイスをもらっている。アービッドもジャックも時に父性的なもの、時に母性的なものを発揮してボーを大事に育てており、ボーは日々の暮らしに満足している。ある日、ボーは言葉を話さない小さな男の子に出会う。この子は寒い避難小屋で死んでいる父親のわきにすわっていたところを見つけたのだ。やがてわかったのは、この子の名前はグラフトンで、子だくさんの叔母は孤児院に預けてほしいと願っていることだった。ボーは、グラフトンも養子にしてほしいと父親たちに頼む。父親たちの決断をグラフトンに伝える場面は、こう書かれている。

「うむ、つまりこういうことなんだ」アービッドは、グラフトンの顔色を観察しながら、少しずつ話しはじめました。

「ボーは弟がとってもほしいんだ。グラフトンのことだよ。

わしもジャックも、男の子がほしくてたまらない——これもグラフトンのことだ。

どうかな、この鉱山で、わたしたちといっしょに暮らすっていうのは？」

グラフトンの目はまん丸くなりました。

ボーはこれ以上だまっていられません。

「ジャックがあんたの父さんになって、アービッドもあんたの父さんになって、あたしはあんたの姉さんになるの！」

「グラフトンはわしらの息子になるんだよ」と、アービッドがいました。

グラフトンはひっそりほほえんで、靴下をはいた足を見つめました。

「今の話、わかったと思うかい？」ジャックが心配そうにボーにたずねました。

「この子がこんなふうになにこっとするのは、うれしいときだけなの」と、ボー。

こんないきさつで、ボーに弟ができたのです。ふつうに弟が生まれたわけではありませんが、すてきないきさつですから、どちらでもいいでしょう。(p.274)

ボーはすでにこの小さな男の子の気持ちをよくわかっているし、父親たちも決断の前には悩んだものの、今は息子ができることがうれしくてたまらないのである。四人家族のどれひとりとして血がつながっていないわけだが、この作品は全体が日常の楽しさにあふれており、この四人でこれからもあたたかい家庭を作っていくだろうことが予測できる。この作品ではボーはまだ小さいが、続編もあるということなので、ボーが成長して反抗期になったらこの父親たちはどうするのか、興味深いところである。

5. 養子・里子をテーマにしたイギリスの児童文学・YA 小説

ここでは非血縁の子どもと家族の関係をテーマにした四点のイギリスの作品について考察する。絵本『パパとママをさがしに行くの』で示された、養子の主人公が出自を再確認した後で養親を選びとるというストーリーは、読み物の中でも提示される。

イギリスのカーネギー賞作家バーリー・ドハティのYA小説『アンモナイトの谷』²⁰⁾(1996)は、15歳のジェームズが主人公である。思春期のジェームズは養父から飛び込みを習っているのだが、友人が高飛び込みでケガをして意識不明になったとき、「父さんが無理やりやらせたからだ」と養父を責める。間に入ってとりなそうとする養母に対しても、「でもさ、ほんとの息子じゃないからね」と言い放つ。そして、養親に嘘をつき、手がかりのアンモナイトを持って生母を捜す旅に出る。物語は、ジェームズの一人称語りと、もう一人の一人称語りの両方で進んで行くが、もう一人の方は生母エリザベスだということがやがてわかる。そしてこの二人はとうとう出会うが、その時に会話らしい会話をかわすわけではない。生母は「幸せなの」ときき、ジェームズがうなずくと「そう。よかった」と言う。その後戻っていく産みの母親を見送る場面は、こう書かれている。

永遠に心に焼き付けておこうとするみたいに、その人は、じっとぼくを見た。その視線に、ぼくは耐えられなくなった。しゃがみこんでアンモナイトをスポーツバッグにしまい、そして立ちあがったとき、その人はもう、そこにはいなかった。

夫と、子どもたちといっしょに、ゆっくりと家への道を歩いていた。ぼくは追いかけてなかった。そんなこと、したくなかった。あの人には家族がある。ぼくにだって。(p.171)

その後でジェームズはこう考える。

長い山道を歩いているあいだ、あの人との奇妙な出会いを、くりかえし思いだした。まさか結婚しているとは思わなかった。まして子どもがいたなんて。すごく勝手だけど、ぼくがあらわれるのをいつまでも待っていてくれて、ぼくに会えたらすごく喜ぶと思っていた。別れ別れになった年月を埋めようと、いっぱい質問してくれると思っていた。結局、なんの話もしなかったじゃないか。飛び込みのことさえ、いかなかった。

いったいどうなっちゃってるんだろう。でもとにかく、やろうと思っていたことはやった。お母さんを見つけたんだから。ほんとうに会って、話までした。いまでは、ぼくを産んでくれた人がどんな人なのか、ちゃんと知ってる。

それにもうひとつ、おもしろい変化が起きた。あの人のことを、ほんとうのお母さんだとは思わなくなった。うちにいる母さんが、ぼくのほんとうの母親だ。早く母さんに会いたい。(p.174)

生母に会えたことで満足し、思春期特有の自分探しを終えて、ジェームズは落ち着いて考えられるようになっている。そして、自ら養親を本当の親として選びとる手紙を書く。

母さんと父さんへ

ぼくはいままで、行くはずじゃない場所にいました。生まれた場所を見つけ、母親にも会ったら。なぜぼくを手放したのか、わかりました。あの人といっしょに暮らせないのはわかってます。ただ、会って見たかっただけです。会ってよかった。いまの家に帰れるのが、とってもうれしい。

愛をこめて ジェームズ (p.177)

そして帰宅してすべてを養親に話した後は、こう書かれている。

秘密の谷への旅のことを、なにもかも話したとき、母さんと父さんは、一言も口をはさまずにきいてくれた。話し終えると、母さんが父さんを見た。父さんは、いかにも父さんらしく、ぼくの頭をくしゃくしゃとなでまわし、部屋を出ていった。

「あなたを養子にもらおうって決めたとき、お父さんもお母さんも、未知の世界に踏みこむ思いだったわ。あなたのことは、なにひとつ知らなかったんですもの。捨てられたということ以外はね。正直いって不安だったの。何度も何度もあなたの顔を見て、考えた。どんな子になるんだろう。ほんとうに、うちの子にしていいいのかしら？好きになれなかったらどうしようって。二日ぐらいしたら、やっぱりあなたをもらいたいって思えるようになって、以来、ただの一度だって後悔しなかったわ。だけどね、先週、あなたが行ってしまったときは、あのままあなたを失ってしまうような気がし

た。どこへ行こうとしているのか、わからなかったから。それでも行かせないわけにはいかなかったし、そのあと、うちへ帰ってきてくれますようにと、ただただ祈っていたのよ」(p.178-9)

ジェームズが養親に反抗できるのも、そこにちゃんとした居場所があるからだし、養母の言葉の最後の部分は、子どもが自分探しをする思春期には実の親でも感じる思いなのではないだろうか。

産みの親と養親の対比は、イギリスの作家ミシェル・マゴリアンが書き、ガーディアン賞を受賞した『おやすみなさいトムさん』²¹⁾(1991)にも描かれている。時代は第二次大戦のさなかで、主人公は、空襲を避けてロンドンから疎開してきた9歳のウィリーと、しぶしぶこの子を預かるトム・オークリーというおじいさん。トムは、猩紅熱で妻と生後すぐの息子を亡くして以来、偏屈で人付き合いが悪いと思われている人物で、大柄で雷のような声をしているので、ウィリーは怖がる。そしてこう思う。

ほくって、どうしようもない、わるい子なんだ。母さんはいつもそういう。たいていの母親なら、こんな手ぬるい折檻じゃすむまいって。ウィリーは思わずぶるっと身震いをした。ほくがどんなにわるい子か、あのオークリーさんに知れたらたいへんだ。母さんより、ずっと力が強そうだもの。(p.15)

母親から愛ではなく虐待を受けていたウィリーは、体中に折檻の跡(「青あざとみみずばれとただれのあとで、目もあてられないくらいだった」p.38)があり、虐待のせいで体の発達も遅れているうえに、文字の読み書きもできない。母親から持たされた荷物の中にはムチ打ち用のベルトが入っており、ウィリーはトムからも折檻を受けるのではないかと一挙手一投足に脅えている。トムは、40年間続いてきた規則正しい日課が崩れることにいらだちながらもウィリーの世話を焼き、この子のために滅多に足を踏み入れたことのなかった店に入ったり図書館に行ったりもして、ほかの村人とコミュニケーションをとっていく。

ウィリーは自分のことを気に入る人がいるとは思ったこともなかった。また母親を通してしかものを見たことがなかったので、ベッドで寝るのは死人だけだとか、赤は罪深い色だとか、お風呂に入れば溺れるとか、人のまねをしたら地獄行きだなどと思い込んでいたのだが、トムや村の人たちとつき合い、多様な考え方があることを学んでいく。そのうちウィリーとトムは二人とも変化し、しだいに心を通わせるようになっていく。

「今夜、さっそく始めよう」とトムはきっぱりいった。「それでよかろう？」

「え？」

「読み書きの練習さ。まず名前を書くことから始めよう」

ウィリーの目に涙がにじみ、みつめた地面がぼうっと震んだ。涙のなかから彼は満面に笑みを湛えていった。「ああ、トムさん！」それだけというのがやっとだった。

トムも思いがけず喉にこみあげるものを覚えて、びっくりしながら「さあ、サミーと一っ走りしておいで」としゃがれ声でいった。「わしは夕食の支度をしておくよ」(p.132)

トムは、家の中のいろいろな物に単語を書いたラベルを貼ることまでして、ウィル（トムはこう呼ぶ）を支えてやる。そのおかげでウィルはどんどん心の呪縛から自由になり、力をつけていく。ところがある日、母親から、病気なので帰ってきてもらいたいという手紙が届く。ウィルは、半分は期待をもち、久しぶりに会う母親と抱き合う場面などを想像しながら汽車に乗る。しかし、ロンドンに着いたとき母親の方は息子がわからなかったばかりか、微笑した息子について、こう思う。

母親はぎょっとして思わず後じさりした。笑っている！ 笑顔浮かべている！
これまでと同様、真面目一方の子どもでいてほしい——わたしはそう思いながらこの子を送りだそうとした。何ということだろう。その微笑は彼女の母親としての権威をおびやかすものだった。(p.244)

そして家に入ったウィルを待っていたのは、口にテープを貼り付けられ箱に入れられた赤ん坊だった。ウィルは抱き上げようとするが、母親はそれを禁じる。また、ウィルは描いた絵を母親にプレゼントしようとして何枚も持ってきていたが、母親は関心を持たない。

「わたしゃ、絵なんか見る暇はないんだよ、ウィリー」
「でもぼくが描いた絵なんだから。お願い、見てよ！」
「ウィリー、おまえをたっぷり躰けなおす必要がありそうだね。この絵は焼いちゃうか、施設に送るか、どっちかにしよう。このうえはおまえの悪事が世間に知れないように、願うばかりだよ」
ウィリーは驚き呆れて母親を見つめた。
「盗んだんじゃないったら、母さん、ほんとだよ。ぼくが自分で描いたんだ。目のまえで描いて見せてあげたっていいよ」
「もうたくさんだよ！」と母親はふたたび拳でテーブルを叩いた。
ウィリーはわたしが予想していたよりずっとわるくなって帰ってきた——と母親は思った。口答えをしないでおとなしくいうことを聞くようにさせるのは一仕事だろう。(p.257)

母親は、ウィルの親友になった疎開児童がユダヤ人だと知ってののしり、言い返した息子に暴力をふるって、階段の下に閉じこめる。以下は、その時のウィルの心のうちである。

一瞬彼は、いっそリトル・ウィアワールドに行かなければよかったと思った。そうしたら母さんのことをいい人だと思っていられただろうに。ほかの人と比べようがなかったろうから。絶望感の怒濤が身のうちに荒れ狂い、彼はこの新しい目覚めを呪った。こうした痛みを長いこと経験しなかっただけに、それは堪えがたいほど苦痛だった。

「トムさん」と彼は闇のなかでささやくように繰り返した。「トムさん、ぼく、トムさんに会いたい」彼は声を抑えて泣いた。(p.261)

ウィルが悲惨な状態に逆戻りしたことをトムは知るよしもなかったのだが、ある時、夢でウィルの悲鳴を聞く。すると心配で居ても立ってもいられなくなり、ロンドン行きの汽車に飛び乗る。そしてようやくたどりついた家で、ドアを破って入ったときに見たものは、悲惨な光景だった。少年は傷だらけで鋼鉄製の管に縛り付けられ、自分の糞尿の中に放心したようにすわっており、両手には落命した赤ん坊を抱えていた。母親は失踪し、ウィルは赤ん坊と共に遺棄されたのだ。おまけにウィルはトルーディと名づけた赤ん坊が死んだことも自分のせいだと思い込んでいた。

病院や役所は、精神科の専門家がいる施設にウィルを入れようとするのだが、トムはそれではだめだと判断し、病院スタッフの目を盗んで田舎に連れ帰る。そして、だいぶんたって母親が自殺したことを聞ころには、ウィルはもうかなり落ち着いて、健康な子どもらしさを取り戻し、生を肯定できるようになっている。

「生きていたくないなんて——そんなことを考える者が本当にいるのだろうか。したいことが限りなくある毎日。雨の夜、風の日、海の大波、月の満ちかけ、読みたい本、描きたい絵、聞きたい言葉」(p.367)

やがてトムはウィルを正式に養子に迎えることができ、二人は手を取り合って歓声を上げながら部屋中をおどりまわる。ウィルがトムのことを初めて「父さん」と呼んだ場面は感動的であり、これからの二人の生活を祝福するように描かれている。

ウィルが眠りに落ちた後、トムも床に入ったが、ウィルの言葉の意味がこのときはじめて胸のうちに沈んだ。

「あいつ、わしを『父さん』と呼んだ」と彼はしゃがれ声でつぶやいた。「父さんと」胸がつぶれるほど幸せな気持ちで、トムは声を抑えて泣いた。涙がさんさんと頬を伝っていた。(p.390)

この作品に登場する母親は極端な例かもしれないが、心理的な虐待や性的な虐待や親の暴力によって心身が歪められる子どもの数は増えている。作者はそんな子どもたちに寄り添い、血縁より愛情のある暮らしが大切だと伝えているのである。

イギリスの大人気作家でありチルドレンズ・ローリエトも務めたジャクリーン・ウィルソンが主人公に取り上げるのは、たいていがシリアスな家庭状況をかかえた子どもである。そのような作品は普通ならベストセラーにはならないが、ウィルソンの場合は、文体に勢いやリズムがあり、笑える箇所もちりばめているので、愛読する子どもがたくさんいる。彼女の作品に挿絵を描いているニック・シャラットも、暗くない雰囲気を作り出すのに一役買っている。ウィルソンの「トレイシー・ビーカー物語」シリーズ²²⁾は、イギリスでは「養子を選ぶ養子の本トップ10」の3位に登場している²³⁾。10歳の少女トレイシー・ビーカーは、里親や施設を点々としてきて、『ガラスの家族』のギリーと同じように生母を理想化し、いつかは生母が迎えにきてくれるという夢にすがって生きている。自分を必要以上に強く見せ、気に入らないと暴力をふるうのもギリーと同じである。1巻目では施設にいるトレイシーと、作家のカムが知り合う。トレイシーのような子どもは猫なで声や不自然なおとなを拒否するが、カムには気負ったり、とりつくろったりするところがない。トレイシーはカムに、母親が迎えに来るまで里子にしてもらえないかと申し出る。母親は滅多に会いにこないし約束もすっぱかすのだが、トレイシーはそれでも母親に憧れている。一方カムは自分の生母とはうまく行っていない。カムを自分の理想に近づけようとしているからである。2巻目ではクリスマスに上演する『クリスマス・キャロル』の主演スクルージを演じるようになったトレイシーが、母親に見に来てほしいと手紙とプレゼントを送るが、母親は姿を現さず、トレイシーは理想と現実のギャップに気づきつつある。3巻目ではトレイシーはカムの里子になっている。そして、トレイシーは落ち着いた環境の中で、自分は生母を美化していたことによりやく気づいて、いらだっている。

ママはたぶん、まともな女優でさえなかったんだ。あたしが知ってるようなハリウッド映画には、きっと出たことないんだ。あれっきり面会にこなかったのは、めんどくさかったからだ。それで、あたしを施設にあずけっぱなしにしたんだ。何年も。(p.61)

しかしある日、生母が現れて、一緒に暮らそうと言い出す。トレイシーは期待し、一方では少し懸念しながら生母の家で過ごす。しかし、うまくいかない。母親が夜になるとトレイシーをおいて飲みに出かけ男を連れて帰ってきたりするからである。ウィルソンは、それでもこの生母のことを悪くは書かず、一緒に暮らしていないので、何か買ってやる以外に愛情の示し方もわからないというふうに書いている。結局トレイシーはカムのところに戻り、口げんかしたり、仲直りしたり、ふざけたり、おしゃべりしたりして、この里親と暮らすのである。

イギリスの売れっ子作家であり、チルドレンズ・ローリエトも務めたマイケル・モーパールの『月にハミング』²⁴⁾ (2014) も、「ブックリスト」が選ぶベスト YA 本に選ばれるなど人気が高い。舞台は第一次大戦中のイギリスで、アメリカから母親と一緒に豪華客船に乗った少女が、ドイツ軍に撃沈された船を脱出して一人でただよっているところをドイツ軍兵士に助けられてイギリスの島まで運ばれる。この少女は、口がきけなくなっているが、島に暮らす庶民の家庭に引き取られる。ただ、少女が見つかったときドイツ語が書いてある毛布にくるまっていたことから、ドイツ人ではないかと島民に思われて迫害も受ける。その時、少女を引き取った家族は少女を守り抜く。戦時中のことなので、正式な養子や里子という手続きは経ていないと思われるが、非血縁の親が育てている子どもに愛情を注ぐという意味では、この作品にも注目しておきたい。

6. おわりに

国連の統計で2011年の婚姻率と離婚率を見ると²⁵⁾、アメリカは婚姻率6.8で離婚率が2.8、イギリスは婚姻率4.5で離婚率が2.1なので、離婚する割合が非常に高いことがわかる。親による子どもの虐待も増えている²⁶⁾。いくらローラ・インガルス・ワイルダーの家族像を理想としたところで、現実はその理想から乖離しているのである。そうした国の作家たちは変貌する家族像に合わせて子どもに寄り添う作品を書いてきたし、血縁ではなく一緒に過ごす時間の質が家族を形成するという考え方も今や一般的になったと言えるだろう。

日本は前述の統計では婚姻率5.2、離婚率1.8で、英米に比べればまだ離婚者の数は少ないが、親による虐待も増えており、旧来の家族像は崩壊しつつあると言ってもいいだろう。しかし、日本ではまだまだ多様な家族像を描く絵本や児童文学は多くない。原因の一つは、出版社や編集者の多くが、最大公約数の家族像（だと思っているもの）を登場させた方が本が売れると思っているからであり、もう一つはシリアスな状況をユーモアを交えて書ける作家が少ないからである。また一般的に日本の作家は視野が狭いという理由を挙げてもいいかもしれない。

朝日新聞 GLOBE の「養子という選択」（2011年11月6日）によれば、日本でも血縁の親が育てられない子どもは増えているのに、そのうちの多くが施設に入り養子縁組はきわめて少ないという。そうした状況を反映してか、現代の日本の児童文学では養子や里子を描く作品も少ない。

非血縁者が家族をつくるという設定で描かれた日本の児童文学には、すでに挙げた作品のほかに、柏葉幸子の『岬のマヨイガ』（2015）がある。これは、東日本大震災後に年齢の違う3人の女性が一つの家族をつくるというストーリーになっているが、特殊な環境・事情での非血縁家族であり、通常的环境を舞台にして描かれたものではない。しかし、外国作品の翻訳を読んでいる作家も多くなってきたので、今後はもっと違う新しい家族像が日本の作品にも登場することを期待したい。

注

- 1) Kuklin, Susan. *Families* (New York; Hyperion, 2006)
- 2) 定松正「ワイルダー、ローラ・インガルス」日本児童文学学会編『児童文学事典』（東京書籍 1988）
- 3) しかし近年では、北米先住民の描き方などが大いに問題視されている。
- 4) 『大きな森の小さな家』（*Little House in the Big Woods*, 1932）『大草原の小さな家』（*Little House on the Prairie*, 1935）『プラム・クリークの土手で』（*On the Banks of Plum Creek*, 1937）『シルバー・レイクの岸辺で』（*By the Shores of Silver Lake*, 1939）『長い冬』（*The Long Winter*, 1940）『大草原の小さな町』（*Little Town on the Prairie*, 1941）『この楽しい日々』（*These Happy Golden Years*, 1943）『はじめての四年間』（*The First Four Years*, 1971）『農場の少年』（*Farmer Boy*, 1933）で、いくつかの出版社から訳者を変え、時には書名も少し変えて出版されている。
- 5) Cleary, Beverly. *Beezus and Ramona* (New York; HarperCollins 1955) 『ビーザスといたずらラモーナ』松岡享子訳 学習研究社 1969
- 6) Cleary, Beverly. *Ramona and Her Father* (New York; HarperCollins, 1975) 『ラモーナとおとうさん』松岡享子訳 学習研究社 1982
- 7) Cleary, Beverly. *Dear Mr. Henshaw* (New York; HarperCollins, 1983) 『ヘンショーさんへの手紙』谷口由美子訳 あかね書房 1984
- 8) MacLachlan, Patricia. *Sarah, Plain and Tall* (New York; HarperCollins, 1985) 『のっぼのサラ』金原瑞人訳 福武書店 1987／徳間書店 2003（引用は徳間書店版）
- 9) Konigsburg, E. L.. *Journey to an 800 Number* (New York; Simon & Schuster, 1982) 『800番への旅』岡本浜江訳 佐学社1987（引用はこの版）ほか
- 10) Vawter, Vince. *Paperboy* (New York; Delacorte Press, 2013) 『ペーパーボーイ』原田勝訳 岩波書店 2016
- 11) Fine, Anne. *Step By Wicked Step* (London; Hamish Hamilton, 1995) 『それぞれのかいだん』灰島かり訳 評論社 2000
- 12) Keller, Holly. *HORACE* (New York; Greenwillow Books, 1991) 『ママとパパをさがしにくくの』末吉暁子訳 BL 出版 2000
- 13) Curtis, Jamie Lee. *Tell Me Again About the Night I Was Born*, ill. by Laura Cornell (New York; HarperCollins, 1996) 『ねえねえ、もういちどききたいな わたしがうまれたよのこと』坂上香訳 偕成社 1998
- 14) 『たからものはなにあに』あいだひさ作 たかばやしまり絵 偕成社 2009
- 15) Richardson, Justin & Peter Parnell. *And Tango Makes Three*. Ill. by Henry Cole (New York; Simon & Schuster, 2008) 『タンタンタンゴはパパふたり』尾辻かな子、前田和男訳 ポット出版 2008
- 16) Paterson, Katherine. *The Great Gilly Hopkins*. (New York; HarperCollins, 1978) 『ガラスの家族』岡本浜絵訳 偕成社 1989
- 17) Rylant, Cynthia. *Missing May* (New York; Orchard Books, 1992) 『メイおぼちゃんの庭』斎藤倫子訳 あかね書房 1993
- 18) Cushman, Karen. *Rodzina* (New York; Houghton Mifflin, 2003) 『ロジーナのあした〜孤児

- 列車に乗って』野沢佳織訳 徳間書店 2009
- 19) Hill, Kirkpatrick. *Bo at Ballard Creek* (New York; Henry Holt, 2013) 『アラスカの小さな家族～バラードクリークのボー』田中奈津子訳 講談社 2015
- 20) Doherty, Berlie. *The Snake-stone* (London; Hamish Hamilton, 1995) 日本語版は中川千尋訳 単行本は『アンモナイトの谷』1997 (引用はこちら) / 文庫は改題されて『蛇の石 秘密の谷』2001 共に新潮社
- 21) Magorian, Michelle. *Goodnight Mister Tom*. (London: Kestrel, 1981) 『おやすみなさいトムさん』中村妙子訳 評論社 1991 (引用は1997年の5刷)
- 22) Wilson, Jacqueline. *The Story of Tracy Beaker*. Ill. by Nick Sharratt (London; Doubleday, 1991) 「トレイシー・ビーカー物語」(1)『おとぎ話はだいきらい』稲岡和美訳 2000/2010 (2)『舞台の上からママへ』小竹由美子訳 2010 (3)『わが家がいちばん!』小竹由美子訳 2010 共に偕成社
- 23) ガーディアン紙「養子を選ぶ養子についての本トップ10」(英国養子・里子協会の後継である CoramBAAF によって選ばれている): <https://www.theguardian.com/childrens-books-site/2015/oct/22/top-10-books-about-adoption-chosen-by-adopted-children> (2016年8月25日閲覧)
- 24) Morpurgo, Michael. *Listen to the Moon* (London; HarperCollins, 2014) 『月にハミング』杉田七重訳 小学館 2015
- 25) UN Demographic Yearbook 2014. 人口1000人に対する率が示されている。
- 26) Child Maltreatment 2014: <http://www.acf.hhs.gov/sites/default/files/cb/cm2014.pdf#page=31> (2016年9月1日閲覧)
- NSPCC Statistics on child abuse (U. K.): <https://www.nspcc.org.uk/services-and-resources/research-and-resources/statistics/> (2016年9月1日閲覧)

New Types of Families Described in Picture Books and Children's Fiction: Step-parents, Adopted Children and Foster Children in Picture Books and Children's Novels in U.S.A. and U.K.

Yumiko SAKUMA

Families appear very often in children's picture books and children's novels. However, images of the families presented in those books have changed with time; and recently, new types of families dealing with not only divorce or remarriage of parents but also single-parents, runaway parents, abusive parents, or adoption and fostering have increased in children's picture books and children's novels. This paper surveys how award-winning or best-selling picture books and children's novels describe non blood-related families such as step-parents, adopted children and foster children mainly in U.S.A. and U.K. Part 1 discusses how the description of families changes with time. Part 2 discusses the description of step-parents in recent children's fiction. Part 3 discusses how recent picture books describe adopted or foster children. Part 4 discusses how recent children's novels in U.S.A. describe adopted or foster children. Part 5 discusses how recent children's novels in U.K. describe adopted or foster children. To conclude, the authors of these books try to support the children in difficulties, and they also try to tell us that love and time spent together happily is more important than blood relationship in raising children.

Keywords : children's books, step-parents, fostering, adopting, families
